シカはどこに行った？

野生動物学研究室講師　南　正人

シカの痕跡と植物への影響を調査するために、夏に浅間山の牧場の周辺（標高 1200m 位の中腹にある）を歩いた。昨年の晩秋には糞も多く、発情行動の痕跡も残っていた場所である。しかし、見つかるのは古い糞ばかり。それも少しだけ。植物に詳しい中村匡男氏（アファンで鳥の調査をしている）と一緒だが、植物がシカに食べられた跡もない。いったいどういうことだろう。牧場には牧草が生えている。初夏から放牧された牛がうろうろしているのが嫌なのだろうか。

その頃、４年生の小林君とカモシカの糞を探しに、浅間山の標高 1900m 以上に登ってみた。浅間山麓国際自然学校の杉山君（テンの糞の採集をお願いしている）が案内してくれて、カモシカの糞が見つかった。そして、偶然そこで新鮮なシカの糞塊をいくつも見つけることができた。杉山君によれば、少し前に 1900m 付近でシカを見たという。シカは、標高の低いところから、高いところに移動しているようだ。

JA の職員に聞いても、山中の農家の人に聞いても、山中の旅館の主人に聞いても、「そういえば、夏には中腹では見ない」という答えだ。このことは、シカにとっては、牧場より、標高の高いところの自然にある植物を選んだことを意味する。これは私にとっては、想定外であった。昨年の秋のあのおびただしい痕跡は、私に「シカは牧場に執着している」という思い込みをもたらしていたのだ。「栄養価が高く簡単に得られる牧草に執着しているに違いない」と。これは大きなはずれだった。シカは春から夏にかけて、若い葉を求めて標高の高いところに移動するのだろう。私は美ヶ原のように標高の高いところの牧草地にシカが集まるのを見て、「牧場が魅力的」と思ってしまったのだろう。標高というもうひとつの軸を考慮にいれるべきだったのだ。

環境省のフォーラムで旧知の富士山の山岳ガイドに会った。彼は、「最近、富士山の上の方でカモシカに頻繁に会います。しかも、カモシカとカモシカの間の距離が短い感じがします。下の方では、あまり見かけなくなりました。」と言っていた。シカの増加は、カモシカの生息場所にも影響を与え始めているのかもしれない。山に通いつめているガイドの正直な観察は、そんな異変に研究者よりも早く気づくのかのかもしれない。